思い出

我が小学校時代の思い出をいざ筆を持って文章に表わそうとすると、ただただ懐しいと思うばかりで一向にうまく書けないのです。だが、しかし今も思う、それは、まず校舎を思い出す。先生の姿、顔、懐しい友の顔である。こうして目を閉じれば聞えて来る歓呼の声、あの顔、この顔なつかしい顔、すべて思い出である。利を難れ、欲に動く事なく全てに純粋であり、共に遊び語り、共に歩いた友の顔、それらを思い出す度に今あいつはどうしている。その時のあいつは元気にやっているだろうか、便りなきは無事の証拠といえど多くの思いが胸をよぎるのである。

4年生の時に太平洋戦争が始まり、尋常高等小学校が国民学校となり、戦時色の強い教育内容となり、皇国理想を強調した兵隊時代となり戦争の拡大は日常生活にも、学校生活にも大きな変化をもたらし、戦況が切迫し本土決戦の態勢となり、学校にも軍隊が駐屯し、運動場も約半分程軍隊の馬居兵舎として防空壕堀りの勤労奉仕や、強制的な供出活動出征兵士の歓送や、神社参拝等の行事が課せられ、その上警戒警報が発令されると同時に帰宅したため、学校教育は事実上停止したと思っても過言ではなかった。そして敗戦という未曽有の苦しみによって閉じられた。今こうして書いているそれぞれの時間のエピソードがつぎつぎと思い出される。いついかなる時代に生きようとも、同じ先生に教えて頂いた同窓生としてのきずなは強いものである。道でいきあえばつい声をかけたくなる。苦しい事、嬉しい事も話したくなるその基盤である母校を思い、母校の発展を念う気持はいつになってもかわらない。こうした友を持ち、良き母校を持っている幸をしみじみと思うのである。

（高豊校区総代　黒田九一）